

技術者のあり方をめぐって

関西大学 社会安全学部 小澤 守

データの改竄、捏造などは産業界のみならず真理を追究するはずの大学においても絶えず発生している。何故そのようなことが起こるのか。研究者あるいは技術者、経営者が本来の職分を十分に理解していないことに原因があるように思う。競争相手よりいち早く新しい事実を発見し、論文として公表したい。それによって高く評価されたい。納期に間に合わせるため、多少の問題には目を瞑り、利益を確保したい... などさまざまな目論見があろう。

一番乗りを目指すのは科学研究に限ったことではない。各種の運動競技はその類であり、各自が精力を傾けて戦うのであるが、一定の「ルール」のもとに正々堂々と戦うのが基本で、だからこそ宣誓しているのである。宣誓が「先制」であってはならないし、単なる「センセイ」でもいけない。科学技術の分野においても一定のルールがあり、改竄や捏造は単なるルール破りだけでは済まず、場合によっては個人や社会が大きな影響を蒙るのである。

技術者教育の質保証のためのJABEEによる認証においては、「技術者倫理」が必修とされている。技術者倫理はEngineering Ethicsの翻訳ではあるが、著者はこの翻訳は不相当と考えている。産業分野でデータの改竄問題が公表されると、必ずといっていいほど技術者に倫理観が乏しいからであるとの評価が下され、論文のデータ捏造があると、研究者倫理の教育が大学教員に課せられる。なぜ改竄が行われ、なぜ捏造に至ったのか、根本的な問題を掘り下げることなく、技術者、研究者にその責めを負わせる風潮は根本的な問題を覆い隠す。

Ethicsは、Merriam Webster¹⁾によると、何が良くて何が悪いか、あるいは何が正しくて何が間違いかについて判断を下すための教育訓練であるという。つまり誰も見ていなくても、その個人にとって正しいと信じることができるかどうか問われているのである。企業において技術者は組織のなかにあつて、正しいと信じるのが貫き通せる保証はない。その意味で、技術者倫理というより「技術倫理」というべきであろうし、「技術者」に拘るなら「技術者のあり方」というのが分かりやすい。

著者の師である石谷清幹（いしがいせいかん）先生は、昭和44年3月、大学紛争の最中、大阪大学工学部機械工学科の石谷研を卒業する当時の学生に対して贈る一文の中で、技術者の第一の責任は「技術の発達についての見通しをたて、適時、適正にテーマを設定し、これを最低のコストで最短期間に開発すること、および、こうして開発された技術が生産の現場で運用されるのを、その専門的能力を駆使して援助すること、この両者が技術者の職分であり、これを完全に果たすこと」、さらに第二の責任として「一般人の理解しえない特殊な専門をもつ人が、一般国民に対して負う責任である。これは必ずしも企業に勤務する技術者だけの特殊な責任ではない。弁護士、医師、教師、科学者など、一般人から見て専門家といわれる人には、すべて一般人に対してその専門の故の特殊の責任がある。一般人の予測できる範囲をはるかに超えた問題によって一般人が被害をこうむるとすれば、それは国民にとっていわれない被害といわざるを得ない。これを国民に対して警告する責任は、どこまで

も専門家のものである」と述べている。これはまさしく **Professional** の定義そのもので、技術について正しい知識を持ち、良心に基づいて行動しなければならないのであり、何も技術者に限らず、技術者に対して指揮命令系統を有する経営者も当然ながら含まれる。このことは英国の **The Institution of Mechanical Engineers**、米国の **The American Society of Mechanical Engineers**（機械技術者協会、日本では機械学会というのが通例）の設立には企業経営者も多く参画していたことから伺える。

著者のもう一人の師である赤川浩爾先生に頂いた資料に、『初級技術科士官心得（案）』²⁾なるものがあり、その第2項には「技術ハ人格ノ反映ナリ。人格ヲ磨カザレバ優秀ナル技術ノ生ゼザルコトヲ銘記スベシ」と記載されている。この資料は『飛行機設計論』、『最後の30秒－羽田沖全日空機墜落事故の調査と研究』などを著された当時の帝国海軍山名技術少佐、後の東大教授山名正夫氏によるものである。技術に関わるものにとっていずれも非常に重たい言葉である。



『初級技術科士官心得（案）』の表紙

1) Webster's Third New International Dictionary.

2) 海軍航空技術廠，昭和18（1943）年7月..